

河内愛子
こうち

6

ふじこちゃん一家は、周到な準備と父親の判断のおかげで全員ぶじだった。五十年後、聞いたことによれば、彼女を担架にのせて父とすぐ上の姉のよっちゃんが前後を持った。しかし十九歳の娘は重く、三回もころげ落ちた。結局、六十歳過ぎた父が彼女をおぶった。あとでわかったことだが、彼女の父は無職と見えていたし、車も電話も持たなかったが、戦時中、土地のブローカーをしていたのだった。戦死者や疎開者で人の出入りが多かったからか、土地はどんどん値下がりした。空襲後、菊田家は五カ所の屋敷を持つようになっていた。

彼女の母はいつもおっとりやさしい人だったが、仙台の大きい旅館の娘さんで、夫は入り婿^{むこ}だった。やがて彼は義父と不仲になり、うちの隣の家と土地をもらって旅館から追われたという。

祖母と伯母のところにいたわたしを、ふじこちゃんがとても会いたがっていると、お父さんが迎えに来てくれた。怖い小父さんと一時間近く歩いて着いた小松島の菊田家は、もとの家よりはるかに大きかった。焼け出された家族とは全く思えない。ふじこちゃんはやっぱり寝ていたし、お父さんは威張っていた。変わったところは、サイパン島で死んだと思われていた長男の家族が生きて帰っていたことだった。歓迎されずに身を縮めて、こき使われている様子は、見ていて不愉快だった。ふじこちゃんもよっちゃんも、兄嫁を英子、英子と呼び捨てている。お隣さんのときはわからなかったけど、世の中にはこういう変な家族もあるのだった。そのあと三回ぐらい、一時間歩いてわたしは菊田家に遊びに行った。それから便利な駅に近いく所に菊田家は引越した。九十度近く身体が右にかしぐ大変な障害だが、友禅の綺麗な着物で外出できるようになったふじこちゃんは、豊かな家のお嬢さんだった。ただ新しい家にわたしは呼ばれていない。

結核の世紀だった。小学校三年のときからやはり脊髄カリエスで、十年以上消息を知らなかった同級生がふじこちゃんの近くに住んでいることがわかって、わたしは訪ねて行った。その道子さんも一生歩けないと見放されていたのに、両親の諦めを知らない看護で立って歩けるようになっていた。小さいけれども、心も姿もとても美しい女性になっていた。道子さんとふじこちゃんの母はどちらも県立一高女の出身であったのですが二人は友達になり、親しく行き来するようになった。道子さんの家は古いお屋敷で戦災に遭わなかった。彼女もお父さんにおぶわれて火の中を逃げたという。道子さんとわたしも終生の友達になった。

朝鮮戦争（一九五〇）以前だったか以後だったか、その文章がどこに載っていたのか、みな忘れてしまった。両親と共に暮らした幸せな日々と「日本少国民文庫」はぴったり重なる。少国民文庫を構想したのは、当時の高名な作家・山本有三氏だった。彼はプロレタリア作家の仲間ではない。特に日中戦争開始以降（一九三七）、日本は戦争に向かって一目散に走り始めた。教育においても学ぶ力、考える力、感じる力を奪われていく少年少女の未来、国の未来を山本氏は深く憂慮した。「日本少国民文庫」の構想は山本氏のこの憂慮から生まれた。新潮社が応えてくれた。まともな一流の学者たちが協力した。文学関係は山本氏が担当した。一方、軍国主義に抗ったYさんは職に就けず、困窮する。若いYさんに山本氏は編集の実務を任せた。Yさんが少年少女に向けて書き下ろし、出版できずにいる長篇も文庫に入ることになり、リスクを避けるために山本氏との共著のかたちにしてくれた。

衝撃だった。そのときまでわたしは、あの物語は山本氏の著作と思いこんでいたし、文庫の中身に込められた深いメッセージも反戦のころざしも全く知らずにいたのである。もしかして父も自分も心の底ではわかっていた気もするけれども。だが、感動を語りあえる人、友達、あの本を読んだ人は周りに一人もいなかった。だからわたしは未知の会ったこともないYさんに宛てて書いたのだった。

少国民文庫との出逢い、Yさんの著作への思い、父のこと、自分のこと、何よりも戦争への烈しい怒り。

一生懸命の手紙がYさんを喜ばせ、感動させたであろうことが今はよくわかる。国は米軍の占領下で、傷手はまだなまなましい。手紙をくれたのは戦災孤児の一人である。本人に戦災孤児の意識はなかったのだが。

折り返し厚い返事をもらった。手紙にとっても心打たれたこと、お礼のしるしに出版予定の『あらしの前』を送ること。

信念を生きてきた立派なやさしい人柄がまっすぐに伝わった。すぐ『あらしの前』が届いた。オランダの、平和で仲のよい医者一家の第二次大戦前夜の物語で、Yさんの訳だった。よくわからないが、実名の初仕事だったかもしれない。引き続き『あらしの後』が出た。

小国オランダにもナチスの軍隊が攻め込んだ。医者家族は、両親を殺され一人ぼっちのユダヤ人の少年をかくまっていたが、危機一髪、長女が最後のアメリカに向かう船に乗せて少年を送り出す。腕白な勉強嫌いの次男は、レジスタンスの地下グループを手伝う使い走りをして射殺される。運河の国オランダは、ナチスとの戦いのために運河の水門を開き国じゅうを水びたし

にする。米軍のノルマンディー上陸のおかげだったかどうかは思い出せないが、ついに解放と平和の日々が戻ってくる。「あらしの前と後」。これはもしかすると、小説ではなく体験者の記録だったかもしれない。

わたしが大学生だった頃か、Yさんが岩波書店発行の「世界」の編集長になられたことを知った。そういう方だったのである。アルジェリアのフランスからの独立戦争、同じくヴェトナムのフランスからの独立戦争、その前の朝鮮戦争。第二次大戦は終わっても、世界に平和な日はなかなか来なかった。お忙しい毎日だろう。わたしは二回手紙を書き、必ず返事を頂いた。誠実なやさしい方であることがよくわかる。三回目、結婚し山形に来たことを報告した。おめでとう、お父様も喜んでおいででしょう、と葉書を頂いた。以後、便りを書いたことはない。

長女と長男が小学校上級になった時、Yさんの戦時中のあの本が再刊された。小さな出版社の仕事だったかもしれない。無地のペーパーバックであった。「むかし、ママが読んだ良い本よ」と言っただけ、彼らは手にとりもしなかった。たぶん今も古い本棚に残っているだろう。わたしは気にしなかった。時代がちがいきる。『あらしの前』『あらしの後』は二人とも喜んで読んだ。普通の平和な暮らしにも突如ふみこんできて、それをぶち壊す戦争の実態を知ったかと思う。三人目の娘も。二十一世紀がきた。夫も子どもたちもいなくなった。そしてYさんも。何ごとにも終わりがくる。

なのに、とうの昔に終わったと思っていたYさんのあの一冊がブレイクしているという。マンガにさえなったそう。八十年も前に書かれたものが。仰天し、きよとんとなる。パソコンやスマホを使いこなし、活字の世界とは縁のない若者たちの心を何がそれほど魅きつけているのか、と思いつつながら、わたしはまだ昔の原作も今のマンガも手にとる元気がない。人の感受性は時代とともに変わる。少女時代の自分だって、親や祖母の価値観や感性をわかりはしなかった。四十代、五十代になつた娘や息子が当時、Yさんのあの一冊に興味を示さなかったのも何となくわかる。TVやマンガが猛威をふるっていた時代、うちの子どもたちはけっこう読書家だったけれど。スマホ時代の若者があの本に向かう理由へのわたしの推理は、目下この程度である。

この一冊の中のとぶん体育会系上級生の理不尽な暴力はきわめてリアルだから、弱い下級生へのいじめとともに、今の若い世代にも理解できることだろう。

一方、本の中の人物のあいだに分断はない。みごとにない。少年たちの友情、少年と母親、叔父さんと甥、姉と弟、彼らをつないでいるのは信頼と言葉だ。それらが欠けている時、人は分断される。本の中の一人一人は、そのことを熱く感じさせてくれるのかもしれない。あこがれの世界、しかも彼らをつないでいる言葉は、今も十分に使える日本語である。

記憶まちがいが、忘れていることは山ほどあるにちがいないが、八十年昔の記憶だけでわたしは覚えてこれを書いている。本の中の叔父さん、お母さん、お姉さん、少年たちの声が聞こえてくるか

ら。それらは若いYさんの魂をかけたメッセージだ。言葉の力である。欠けているからこそ、今を生きる世代の数人は彼らの生き方に共感するするのかもしれない。

〈付記〉

朝鮮戦争の引き金で日本の戦後復興は本格的になった。敗戦の十年後、ほとんどの家族において食べ物探しの苦労は終わった。一方、菊田家は逆に坂をころげ落ちていった。

屋敷一軒を手放した金額が、ある期間の菊田親子の生活を支えた。兄の家族に続いて、姉三人は結婚した。インフレーションでただに近くなる現金と比べると不動産の価値はきわめて強かったが、七十歳を過ぎた父親にそれらを動かす才覚や見通しはなかった。残りの一軒は何としても末娘が生きていけるよう有効活用しなければならぬ。さいわい地価は値上がりが続いている。人並みに歩けないふじこちゃんのできることは限られている。誰のすすめであったのか、良い場所をえらんで煙草屋をさせる、それが一番安全で手堅いプランだった。「お父さんの決めることに間違いはない。三人でいつも一緒にいられるし」と、末娘は思った。一九六〇年も経済は上向いて、煙草の売り上げに悪影響するとは思えない。市役所の近くに焼け跡の土地が見つかる。更地にし、家を建て店を出す。どの過程で父親が詐欺師にだまされたか、娘も母もわからない。二人とも父を信じ切っていたから。最後の屋敷一つの売り上げ金額がゼロになっていた。警察に駆けこんでも、相手はつかま

らなかった。

六一年に生まれた長女をおぶって道子さんに教わった国分町裏の間借りの六畳を訪ねて行くと、ふじこちゃんが出た。入り口に立っていると、眼をまっ赤にした父親とぼーとした母親が出てきた。二人ともわたしがわからなかった。食事の支度も買い物も私がしてるの、姉が時々きてくれるの、と彼女はしっかりと言った。赤ん坊を見る余裕などない。言葉がなかった。親子関係も逆転した。両親をおぶっているのは彼女だった。

さらに十年、二人を見送ったふじこちゃんは市役所のすすめで市の南はじの一番古い市営住宅に移った。子育てや仕事やらで仙台にも行く暇がない。市の北で生まれ育ったから、きょうだいも知り合いもないところに行くのは辛いって言ってたわと道子さんから聞いた。

ようやく時間ができた。電話はないから、いきなりバスで行った。もちろん彼女はいた。二間の家に入るなり、目をみはった。畳には塵ひとつ落ちていない。奥の部屋の仏壇はピカピカに拭き抜かれ、みずみずしい桔梗と小菊が飾られ、柿が二個そなえてあった。うちよりはるかに綺麗だ。驚嘆して口がきけない。

「足が痛くてなかなか出かけられないのね。この頃は悪くなかった足が痛むの。花が切れた時だけ、頑張つてバスで花屋さんに行くのよ」

バス停までもかなりあるのに。彼女は立派に生きていた。

九〇年、彼女は特養にいた。介護保険はまだない。珍しくわたしと夫はその夏、フランス一周のツアーに出かけた。たまにはいいかなと思つて旅先から、三通ポストカードを出した。帰ってから道子さんを誘つて久しぶりに特養を訪ねると、六人部屋から眼をキラキラさせて彼女が出てきた。「珍しいきれいな絵はがき三枚もありがとう。事務室の若い男の子が、珍しい切手欲しい欲しいつて言うからあげたのよ」

と嬉しそうだった。おみやげひとつも買つてこなかったのに、とわたしは申し訳なかった。間もなく彼女は直腸癌になり、人工肛門になった。病院に行くと、彼女はベッドから見上げてにっこりした。

「お父様に似てくれましたね」

と、昔と変わらぬ笑顔だ。でも見舞いにはなかなか行けない。姉のよっちゃんと甥の方々が時々見えるらしいから、ほっとはする。道子さんも遠路を頑張つて行つてくれた。退院したものの経過は良くない。我慢していたあげくの手術だから手おくれだったに決まっている。やつと訪ねると喜んで彼女は話す。

「寝ているとピアノが聞こえるでしょう。あいこちゃん上手になってきたと言いながら聞いてたのよ」

ああ、わたしたちの黄金時代！

そういえば、彼女は教会附属幼稚園の第一回卒園生であった。

間もなく特養から、頼みこんでいた電話がきた。

「なかなか承知なさらなかつたけど、やつと入院されました。あと三日だそうです」

仙山線に乗った。四人部屋の窓側。呼んでも眼をあげない。かまわず話すことにした。

「ふじこちゃん、長いことっぱいっぱい頑張つたね。えらかつたね。もうじきお父さんとお母さんに会えるよね。よろこばれるよ、きつと」

彼女が幼稚園児のとき歌い、長い病床でまた園児たちの歌うのを聞いていた「こどもさんびか」を小さい声で歌った。仏教徒の彼女が聞きたかつたのは、別の何かであろうけれど、わからない。

こどものともは、どなた、どなた、こどもをまもるエスさまよ、ホサナとうたえ、ホサナとうたえ、こどもをまもるエスさまよ

握った手はやわらかく冷たかつた。翌日、彼女は父母のもとに帰って行った。七十九歳だったと思う。帰つて行くお墓があるのは何よりだった。わたしは菊田家のお寺とお墓がどこか知らないけれど、帰る場所のあるふじこちゃんは幸せであつた。